

ポートレート
コレクション展 2010 - III 『肖像：黙して語る』

2010年11月20日(土)-2011年2月24日(木)

このコレクション展では、「肖像（ポートレート）」作品を取り上げ、「肖像」が、描かれた対象の人となりを表し、その個人の意思を表明するだけでなく、描かれた時代の社会、普遍的な概念等をも語りうることを考察します。

遠くへ旅立ってしまう、愛しい人の姿を自分の元にとどめるため、相手の姿の影を線でなぞり形を得て、不在の人物を現前化させた—古代ローマの政治家プリニウスがその著書『博物誌』に記した絵画の起源は、そのはじまりから「肖像」との関連を示唆しています。これまで、芸術家たちがさまざまな手段を用いて表してきた肖像は何を語り、そこから私たちは何を受け取るのでしょうか。

扮装し別の人格になりきる手法で制作する森村泰昌は、作品に入り込み名画の登場人物となることで作家の視点から作品解釈を提示します。また、シンディ・シャーマンはさまざまなシチュエーションの架空の女性を演じ、マス・メディアが作り上げた女性像を皮肉に現前化させます。

自身を表した自画像では、アーティストの容姿の詳細を表すことよりも、その志や思想、政治的姿勢を伝える表現が選ばれると言えるでしょう。

写真家ウーゴ・ムラスは、1950～60年代のアメリカで、アート界を席卷したポップ・アートの旗手たちを写真におさめました。なかでも時代の寵児アンディ・ウォーホルは、誰もが知る女優の姿を執拗に反復することでアイコン化し、その結果としてアイコンそのものが永遠の命を得るという偶像生成のプロセスを暴きました。

名もなき、匿名の対象を表した寡黙な肖像は、対象となったモデルの身元証明や肖似性とは異なる別の視点—特異な素材や制作方法、肖像に託されたさまざまなメッセージ—を気づかせてくれるでしょう。

こうして「肖像（ポートレート）」は、対象となった人物の人とをりを示すだけでなく、時代の証人となり、さまざまなことを伝達する。黙したままの肖像は、観る者が静かに対話を始めれば、かくも多くのことを伝達します。

【会期】 2010年11月20日(土)～2011年2月24日(木)
【会場】 広島市現代美術館 (広島県広島市南区比治山公園1-1)
【開館時間】 午前10時-午後5時 ※入場は閉館の30分前まで
【休館日】 月曜日(1月3日・10日除く)、1月4日・11日(火)、
2010年12月27日(月)～2011年1月1日(土・祝)
【観覧料】 一般360(280)円、大学生270(210)円、高校生170(130)円
※()内は30人以上の団体料金
【主催】 広島市現代美術館

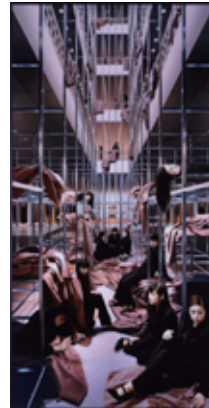
姿をかえる 福田繁雄、森村泰昌、やなぎみわ、シンディ・シャーマン



森村泰昌《肖像（双子）》1988-90



シンディ・シャーマン
《無題 #123》1983



やなぎみわ
《Paradise Trespasser》
1998

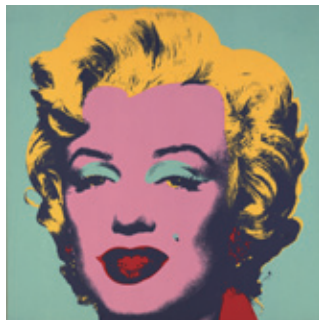
自身を表す 秋山祐徳太子、池田満寿夫、郭徳俊、イヴ・クラインほか



(←左) 郭徳俊《フォードと郭》1974

(←右) 池田満寿夫《自画像》1964

アイコンとしての顔 アンディ・ウォーホル、ウーゴ・ムラス



(←左) ウーゴ・ムラス
《ロイ・リキテンシュタイン》1964

(←右) アンディ・ウォーホル
《マリリン1》1967

無名の人々 草間彌生、舟越桂、奈良美智、アレックス・カツ、ジョージ・シーガルほか



(←左) 舟越桂《言葉の降る森》1989

(←右) 奈良美智
《キープ・ユア・チン・アップ》2001

広島市現代美術館（学芸担当：角 広報担当：後藤、鈴木）
〒732-0815 広島県広島市南区比治山公園 1-1
TEL/082-264-1121(掲載用)・082-264-1146(問い合わせ用・学芸直通)
FAX/082-264-1198
E-MAIL/hcmca@hcmca.cf.city.hiroshima.jp